



ワークショップの様子

イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費：500千円

静岡ホスピタルアートプロジェクト

目的・趣旨

アートやデザインの力を医療・福祉領域に生かし、患者・入居者の文化権の保障、療養環境、及び患者・利用者・職員の心的ストレスの改善を実現するための試みとして、病院における芸術活動を実践するとともに、その活動のプロセスと成果を事業モデルとして発信することで、静岡県内の医療・福祉施設における同様の活動の促進を目指す。

日時・場所

平成28年4月13日から平成29年3月31日
浜松労災病院、駿府博物館、静岡県立こども病院

体制

（実施代表者）文化政策学部 芸術文化学科 准教授 高島知佐子

共催・後援等

（共催）浜松労災病院、駿府博物館、静岡県立こども病院

内容

【浜松労災病院での活動】

・エスカレーターホール

中庭でのオブジェの展示

浜松で活動する建築ユニット+ticによるジャングルジム型のオブジェを中庭に展示。見る角度で物事は「変わる」ことをテーマに、1Fや2F、正面・側面など、様々な視点から異なる色や見え方を楽しめるオブジェを制作。

・図書スペース

病院2F奥の小児科隣の図書スペースを、患者さんに広く知ってもらい、心地よく過ごせる空間にするためにリノベーション。加えて、図書紹介コーナーを設置。

【駿府博物館・静岡県立こども病院】

静岡県立こども病院で働くファシリティドッグの展覧会にちなみ、フォトフレーム作りのワークショップを入院患者を対象に開催。

結果・成果

病院における実践では、申請者が監修者となり、本学の学生（文化政策学部・デザイン学部計11名）と卒業生が浜松労災病院と静岡県立こども病院で活動した。前期は本学卒業生の建築ユニット+ticを制作者に迎え、浜松労災病院の中庭スペースでのオブジェ制作・展示を行った。オブジェは3つの案を用意し、病院職員・患者の投票により決定した。また制作過程を「ホスピタルアート新聞」と題したパネルにし、病院内に展示することで、今後目指していく双方向な活動の基礎づくりを行った（パネルは9枚展示）。

後期はデザイン学部学生が制作者となり、同病院の図書スペースのリノベーションに取り組んだ。図書スペースが職員・患者・地域住民のコミュニケーションの場にもなるよう、職員による図書紹介という活動を取り入れた（H29年度以降も継続）。

静岡県立こども病院ではH28年7月から8月に駿府博物館でおこなれたファシリティドッグ（こども病院で活動する専門的に訓練された犬）の写真展にちなみ、病院の入院患者を対象にフォトフレームづくりのワークショップを行った。ワークショップでは患者投票により選ばれた写真を駿府博物館で展示するための大きなフォトフレームと自分用の2種を作成した。

一連の活動は、鴨江アートセンターでH29年2月から3月に開催された「care」展でも展示され、県内外に発信することができた。またH29年4月8日にグランドホテル浜松で開催されるシンポジウム「IPS細胞の現在と未来」でも活動を記したパネルが展示された。

H28年度のこれらの活動を踏まえて、患者さん・病院職員がお互いを知り、より良い形でつながることができる活動として、H29年度は次の活動へと発展させる。

（1）浜松労災病院では、病院を支えるモノやヒトをテーマにした写真展を開催する。（2）静岡県立こども病院では、病院ではなかなか触れることのできない自然や生き物をテーマにワークショップを開催する。加えて、こどもたちの活動をテーマに、病院で制作された作品を展示する展覧会を駿府博物館で開催する（「へんてこテコテコ展」）。

